

展勝地風土記

Vol.34

令和3年1月22日

展勝地開園100周年記念事業実行委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課 ☎72-8279

展勝地開園100周年記念事業実行委員会、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史的なこと、地理的なこと、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。今回は令和3年4月23日に発行します。

『みちのく民俗村』

展勝地風土記発行事業班

みちのく民俗村は展勝地桜並木の県道向かい、坂を上って北上市立博物館の隣にあります。

広さは7ヘクタールで、詩歌の森公園の約2倍の広さがあり、か



幕末の建築と推定される旧星川家住宅

やぶき屋根の民家10棟をはじめ旧黒沢尻南高校など歴史的建造物20数棟が立ち並ぶ野外博物館です。

昭和48年4月に開館した市立博物館ですが、それ以前の昭和45年3月に考古館が建設され、47年6月には市内口内町から国指定重要文化財の旧菅野家が移築復元されており、当時から野外博物館の構想がありました。昭和58年の旧北上市総合発展計画に総事業費7億2千万円のみちのく民俗村整備事業が正式に盛り込まれました。同年、旧伊達領寺坂番所復元を皮切りに10年かけて整備され、平成4年10月9日、市立博物館開館20周年に合わせて開村式が行われました。

初代村長には森林研究家で東京大学名誉教授の高橋延清さん(旧沢内村出身)が就任。北海道富良野市



初代村長の「どろ亀さん」こと高橋延清さん

の東大付属北海道演習林で「森が教室である」という信念のもと、一度も教壇に立つことなく演習林を育て上げ、森の中を泥まみれになって歩き回っていたことから『どろ亀さん』の愛称で親しまれていました。ちなみに雪氷学者の高橋喜平さんは兄に、直木賞作家の高橋克彦さんはお兄にあたります。

『みちのく民俗村は、社会生活の変化によって活用を絶たれた多くの建築文化財や、祖先から伝えられた民俗文化を守ることを目的として着工され、このたび完成をみた。

この村のねらいとするものは、伝統的な家庭生活の中心であった民家を後代へ伝えながら、社会生活の変化に応じた有効活用を図っていくことである。

みちのくの大地に足を踏ん張り、それぞれの時代をたくましく生きてきた先人の生活を振り返り、心に思いを寄せ、今日を生きる糧にすることである。

あわせて、かつて自然と人間がしっかり結びついていた村の風景を思い出し、環境との関わりを取り戻したい。

みちのく民俗村は、このような願いを込めて、訪れる人々がここで安らぎ、くつろぐ中で、忘れ去られようとしている大切なものをよみがえらせることができる場にすることを誓い、ここに開村を宣言する』

この開村宣言が示すとおり、かやぶき民家を歴史遺産として保存することもさることながら、森を、自然を深く愛したどろ亀村長の「現代社会の便利で快適な生活よりも、自然の中で自然の摂理により自然に寄り添って生活していくことが大切である」という強い思いが感じられます。そして民俗村というかやぶき民家が立ち並ぶ風景にこの考え方を映し出しているように運営の指針としてきました。この思いは、どろ亀村長の後に就任された相沢史郎さん、澤藤雅也さんにも引き継がれ、昭和初期をイメージした村の姿を再現してきました。



旧正月に飾るお供え物の鏡餅

オープン当初は6万人を数えた民俗村の入園者数も年を追うごとに減少を続け、平成26年には2万3千人を数えるほどになりました。市では社会教育施設にとどまらず、民間のノウハウを生かして観光事業にも役立てようと平成27年、市立博物館から商業観光課へ管轄の移管を行い指定管理制度を導入しました。その際に市で示した運営の指針には「文化財としての保存に努めることは当然のこととしながら、新たに観光の視点や地域との協働の展開などにより、なお一層その価値と利用を高める取り組みを展開する」とされ、「特にも、展勝地国見山一帯における自然、歴史、文化、伝統などと調和した活用を進めることにより、(中略)この地に対する理解と関心を高め、展勝地国見山一帯の活性化に資する広がりある取り組みを展開する」とあり、施設の活用にも重きを置いて運営することが望まれています。

民俗村を管理運営する㈱展勝地では専任スタッフを置き、市立博物館運営時からの年中行事であるコト八日や馬まつこつつなぎ、年とし縄なづくりのほか、ひな祭りや七夕などの節句行事を引き継ぐとともに、

さらに風景に相まった「旧暦」による運営を導入しています。また、さまざまなイベントの開催、誘致などにも積極的に取り組んでおり、自然豊かなこの環境を生かした自然観察会は、毎回定員を超えるほどの盛況ぶりです。

情報発信の取り組みとして園内の様子やイベント開催告知も含めた情報紙「かわら版」を月1、2回発行しており、事前に登録された村人あてに郵送またはメールで配信しています。

今後ともみちのく民俗村には、他の民家園にはない、民俗村独自の自然、歴史、文化、伝統のあり方を工夫した運営を継続し、引いては展勝地国見山一帯の活性化に一役買ってもらいたいと思います。



園内の畑でサツマイモの収穫体験



かやぶき屋根のふき替え工事見学会



民家で行うわら細工製作体験